

（選外佳作）要旨

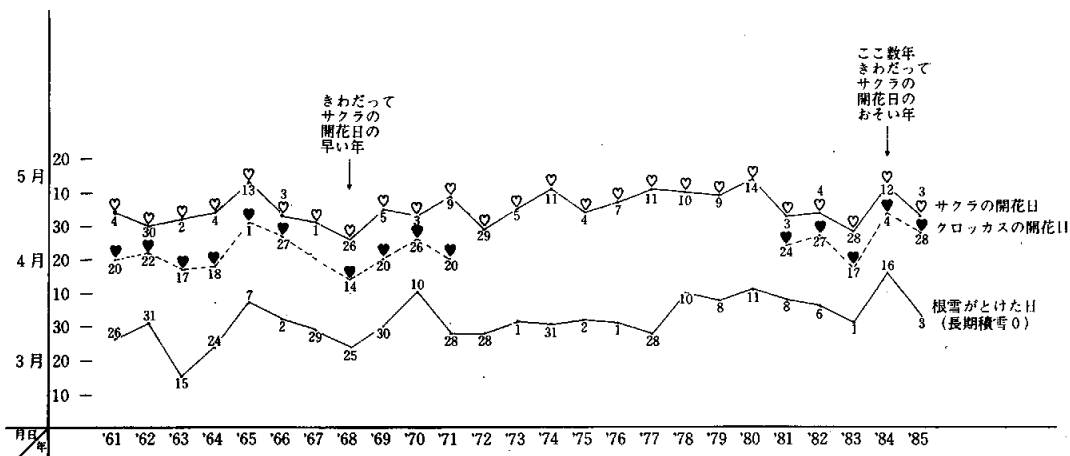
まず身近な自然から

野田 豊子

私は「花日記」と書いた一冊のノートを持っている。毎日つける日記は苦手なのに、おぼえ書きを書くことのある私は、おりにふれて花にまつわることなどをこの中に書きとめてある。家の中の植木鉢の花の柄の伸び具合とか、雪どけのあと庭にクロッカスが一せいに咲き出した日とか、近くの野山でみた野草のことなどさまざまである。なかでも庭のクロッカスについては、一九六一年から今年の春までの間に十五回ほど記している。途中ぬけたところもあるが、私の記録でみるかぎり、一九六八年が大変早く、一九八四年が大変遅い開花であった。

クロッカスが早く咲いた年は根雪がとけたのもサクラの咲いたのも早かったようだし、クロッカスが遅く咲いた年は根雪がとけたのも、サクラの咲いたのも遅かったようだ。しかしこれに関しては詳しい記録がなかった。そこで气象台に問いあわせてみた。

それらをまとめてグラフを作ってみると、その年の春の気象とクロッカスの開花やサクラの開花とが関連



していることがよく解る。

さて、北海道という地域の自然をどう守るかということを考えようとすると、その地域のことだけ考えてはできない。必ず、地球レベルの視点をもつ必要がある。しかもそうした視点を育くむには、まず身近な、ごく身近な室内、庭、近くの公園など、の自然のうつりに変りに注目し、そこからなにかを感じることから始めなければならない。

その一つの例として、一九八〇年夏アメリカ・オレゴン州の「オレゴン科学と工業博物館」(OMSI オムジと愛称)主催の子供のための夏期講座に参加した体験を簡単に紹介しよう。このオムジ講習会「森の生活」は七、九歳の子二十人に小学校の先生が二人ついて、月、木の四日間森の中を散歩したり、お話をしたり、劇をしたりというプログラムで、草や木の名前をあまり教えこまず、曲りくねった道では近道をしないというしつけをつけるなど、子供たちが肌身で自然を理解する方法がとられていた。「森の生活」はいくつかある講習会のなかでも人気のあるプログラムの一つで、もう何年もくり返し開かれているのも、もつともだと思われた。

これらをつまみ、つぎの提言をまとめてみた。

一、室内でも、家のまわりの自然のいとなみのなかからでも、工夫するとそれなりに自然のいとなみを感じ、理解する方法が得られる。

二、自然のふしぎさに気づくには、まず自然に親しむこと、見ることが基本であろう。

三、これらを積極的に効果的に進めるのに、いろいろ

ろな分野の人々の協力が大切である。その一例として「森の生活」を紹介した。いろいろの立場の人が集り、自然保護についての考えをまとめ、質の高いプログラムで息長い実行へとうつつすことが、遠いようで一番近い道ではなからうか。